

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金企画研究プロジェクトⅠ（教員・学生参加型） 2025年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏 名
	コミュニティ政策学科・3年	鈴木紅后
指導教員	所属・職名	氏 名
	コミュニティ福祉学部・准教授	阪口毅
研究課題	住民組織と連携し地域貢献・調査研究を行う インターカレッジ型プロジェクト	
研究年度	2025年度	
プロジェクト 分担者	鈴木紅后、鈴木睦乃、高田佳那、キム・ドゥヨン、米山大雅、上山真央、 青木理倫、瀧野ここみ、朝香七海、星井彩	

プロジェクトの内容及び成果の概要

本プロジェクトは、立川市の都営団地を活動拠点とし、地域コミュニティの調査研究を行ったものである。具体的な活動としては、団地自治会と連携をとりながら、地域行事を通して住民との交流を図る。こうした活動を通して、地域社会の現状や課題について多角的に調査研究を行っている。今回いただいた資金については、研究に必要な宿泊費・交通費として活用させていただいた。

実践活動においては、8月の「大山夏まつり」に昨年に引き続き参加した。本年は子ども向けの遊びブースとして「紙飛行機の作成と的当て」を企画・出展し、コロナ禍以前を思わせる活気の中で幅広い世代との交流を深めた。また、1月に開催された「大山防災フェスタ」では、自治会との連携会議を重ねて準備を進め、立教大学として「防災わなげ」を実施した。これは「わなげ」の的を具体的な防災グッズに設定したもので、参加者が楽しみながら自然に防災備蓄品の知識を深められるよう工夫を凝らした。当日は住民の方から「こんなものも必要なのね」といった感心の声を直接いただくなど、単なる娯楽に留まらない、防災意識の啓発に寄与する実践となった。

調査研究としては、新年度の新規メンバーが団地の背景知識とフィールドワークの手法を習得するため、プロジェクトリーダーの教授陣が執筆した論文をレビューし、団地住民に向けて発表会を実施した。その後、団地全体を巡り、空間構造や周辺環境、今後の行事予定地を視察・把握するフィールドワークを行った。加えて、月1回開催される団地自治会の役員会にメンバーが交代で参加した。団地内で発生した課題とその解決プロセスを観察し、前年度と比較した会議の参加人数や年齢層の変化などを分析することで、団地内コミュニティの変容を捉える調査を実施した。

次年度以降の継続に向け、中央大学「立川プロジェクト」との連携を深め、収集データの引継ぎ体制を整えた。中央大学では2012年より学生有志団体として活動を行っており、本プロジェクトと協力して団地での活動を継続してきたが、今年度は多くのメンバーが卒業を迎えるため、活動の停滞を防ぐノウハウの継承により注力した。具体的には、調査データや住民との対話記録を整理・蓄積し、次年度の参加学生へスムーズに共有する仕組みを構築した。また、定期的な情報交換を通じて世代交代を意識した課題共有を行い、活動の意義を再確認した。

本プロジェクトでは、地域社会との関わりの中での実践と学術的な探究、そして大学間の連携を通じて、地域と各大学の新たな関係性を模索し、メンバー交代を経ても揺るがない継続的な活動への足がかりを築いた。来年度に向けては、今年度の活動を土台とし、継承されたノウハウを活かして実践と研究を往還しながら、地域との関係を維持・発展させ、持続的なプロジェクトとしてのさらなる定着を図りたい。